

# Book Review

## 臨床家のための 口腔顎顔面解剖アトラス

北村清一郎 編著

Reviewer

加藤武彦

(横浜市・加藤歯科医院)

A4判, 222頁  
定価 10,500円  
(本体 10,000円+税 5%)  
医歯薬出版刊



本書の編著者である徳島大学の北村清一郎教授との出会いは、先生が「総義歯に必要な解剖学」、筆者が「デンチャースペース義歯への道」という演題で、一緒に講演をさせていただいたのがきっかけである。それは筆者が長年探し求めていた解剖学の先生にやっとお会いできた瞬間であった。

筆者は、顎堤条件が悪い状況で総義歯を作製する場合、周囲組織の筋圧中立帯を基準とし、辺縁封鎖により維持安定を求めている。Gysi理論から方向転換し、この理論で義歯を製作し、良い結果を得ていたが、その解剖学的根拠を十分に解説した外国の成書には出会うことができなかった。筋肉や粘膜と義歯との関わりを明確に解説していただける解剖学の先生を必要としていたのである。

北村先生の講演中に「今のところをもう少し詳しく教えてください」と筆者が質問すると、その場で詳しく答えていただけただけでなく、さらに次の講演において、その回答となる詳しい解剖所見まで用意された。

たとえば、上顎結節の部位は、上顎

義歯の維持安定にとって非常に重要な場所である。特に、顎堤条件が悪化した場合、患者さんの舌房を確保するため、歯槽頂を外して排列しなければならない。そのような場合でも、吸収される前の骨量を床で補えば、左右で補完をしながら維持安定の良い義歯が製作でき、上顎の総義歯は転覆、脱離しない。

この重要なバッカルスペースについて、解剖学的見地からの意見をうかがうと、「その内部構造は脂肪組織なのでゆとりがあり、十分利用できます」とのことであった。

また、筆者が「義歯を入れてない無歯顎患者は、嚥下にたいへん苦労しています」と述べたことがあるが、本書では「義歯は嚥下にどうかかわるのか」という一項を設け、MRIの画像を示しながら、嚥下時の義歯の役目を明快に解説されている。

筆者とともに摂食嚥下を勉強している神奈川県開業の黒岩恭子先生は、口腔ケア、口腔リハビリテーションをライフワークとしているが、それが顔の表情筋をどう変化させるかが未解明で

あった。この問題についても、解剖学的見地から見解を示されている。診療室や往診などで日々臨床に携わる者として、学問的裏付けが得られたことはたいへん心強い。

本書の特徴として、第2章に「テーマ別 臨床に役立つ口腔顎顔面領域の写真集」が設けられている。顎関節の局所解剖学や喉頭蓋谷と梨状陥凹の解剖構造など、現在の歯科臨床で求めている解剖所見が丁寧に解説されている。

このようなことができるのも、本書の「序」に書かれているように、ほとんどの剖出所見が北村先生自身でされているからである。ここに先生の解剖学への情熱が伺われる。臨床家にとっても、このような解剖学の先生の登場が待たれていた。

最近では、インプラント治療も臨床に定着してきた。本書には、その基になる解剖学、CT画像、パノラマX線写真などを併記した「植入手技のエビデンスを考える」という一項も設けられている。インプラント治療を行う方も、是非とも診療室に置き、座右の書とされることを切に願う次第である。